

人文学部 前期日程 令和7年度入学試験 総合問題
出題意図と解答例

I

【出題意図】

英文は、一般の読者向けの記事である。英文の意味を正しく読み取り、要約する能力を試す問題である。

【解答例】

問1

上げ馬神事では、陣笠に伝統的な装束を身に着けた若者が馬に乗り、急坂を一気に駆け上がり、頂上の高さ約 1.5 メートルの壁越えに挑戦する。この壁越えが何度成功したかによって、その年の豊凶が予測できると信じられている。この神事は 700 年近く前に始まったとされ、県の無形民俗文化財にも指定されている。(141 字)

問2

アヒル捕り競争では、参加者は海に放たれたアヒルを泳いで追いかけて、捕獲した後は食用として持ち帰る。過去にアヒルが乱暴に扱われたことから、生きたアヒルの使用の再考を求められてもいた。アニマルライツセンターは、この年の参加者と主催者代表らを動物愛護法違反として告発する一方、主催者側は、アヒルは糸満の食文化でありこの行事も重要な地域文化の一つであるため動物虐待との批判は受け入れられないと主張している。(198 字)

問3

野馬追は例年 7 月末に行われていたが、111 頭もの馬が熱中症の疑いで催しから引き揚げられ、うち 2 頭が死亡したことを受け、主催者が翌年の実施を 5 月末に前倒しにする方針を示したため。(86 字)

II

【出題意図】

IIでは、イヌと人のストレスに関する実験的研究や調査研究から、関連する統計データを適切に活用・読み解く能力、自分の考えを論理的に整理し、説得的に表現する能力を問う問題である。

【解答例】

問1

友人条件	: 約 0.85 倍
イヌ条件	: 約 0.61 倍

問2

一人だと課題中にストレスが高まるが、友人やイヌと一緒にいると課題中ストレス上昇が抑えられる。また、イヌと一緒にいる場合、課題前からストレスが低く、課題中ストレス抑制の効果は友人条件よりも強い。(94 字)

問3

飼い主のコルチゾール濃度が高ければイヌの濃度も高く、犬と飼い主のストレスは相関関係にある。傾きは競技犬でつく、よりストレスを強く感じやすい。競技犬の方が傾きがきつい理由として、訓練や競技は双方にとってストレスサーになり、それらによるストレスはイヌが飼い主以上に感じやすいと考えられる。(143 字)

Ⅲ

【出題意図】

高等学校等における学習内容についての幅広い理解を前提に、論理的文章を題材として、読解力・思考力・判断力および言語表現能力を試験することを意図して出題した。各設問は、文章全体の論理構造や筆者の主張の理路を正しく読み取るとともに、題意を踏まえて簡潔かつ的確な日本語表現を構築する力を測定することを目的とする。また、受験者が設問に向き合いながら素材文を読解するなかで、たとえば動物と人間との関係における「倫理」の非対称性やその淵源などについて、各自の知識や関心を踏まえつつ深い思索をめぐらせることを想定したものである。

【解答例】

問1

人間が、雌の家畜を生かしたまま、取得・加工した乳からタンパク質を常時摂取できるようになった。(46 字)

問2

雄の遺骨は若いままなのに対し、雌の遺骨はより長く生存したものが多いという特徴を示すと考えられる。(48 字)

問3

筆者の言う食倫理とは、動物殺害を介した食を不浄で避けるべきもの、動物を殺害しない食を清浄で望ましいものとする考え方のことである。この発想は動物の殺害・非殺害を人間が選択できることを前提とする。その前提が成立するためには、乳の利用によって、殺害をせずに家畜から栄養を獲得できることが不可欠であった。(148 字)

Ⅳ

【出題意図】

ここでは、Ⅰ Ⅱ Ⅲの文章をあらためて読み直し、共通する課題を見いだすことが求められている。共通するのは、常に「人間本位」の思想による「動物」の扱いである。「動物の立場」、「権利」という視点から見れば、どの文章にも共通の課題を認めることができる。自分の知見に安易に頼ることなく、文章を読み解くことが試されている。

【解答例】

第1問目は、伝統行事で用いられる動物に対する愛護運動の高まりについてである。ただし、馬の登る坂の勾配を緩やかにし、壁を低くするという三重の「上げ馬」も、開催時期を7月末から5月へと前倒しにするという相馬の「馬追」も、「動物の権利」という観点からは不十分である。第2問目は、最近になって行われている、動物を用いた医療行為の有効性についてである。犬と一緒に過ごすトリラックスできるという実験結果により、有効性が立証されるが、犬自身にストレスがかかるにも関わらず、「動物の権利」という視点は喚起されない。第3問目は、「動物の権利」の起源についてである。家畜を肉取得資源として殺すのではなく、飼育してミルクを獲得し、タンパク源を常時確保できることにより、動物殺害は罪深い行為であるという倫理観が生まれたという。「動物の権利」の発生は、人間本位の副産物に過ぎなかったのである。「動物の権利」という認識を深め、実践していくことは容易ではないが、常に人間本位に都合よく動物との関係を捉えるのではなく、地球上に住む生物同士、どちらも生態系の一員であるという発想を持ち続けることが必要であると考えられる。(491字)